

原文（掃葉山房刊『西遊真詮』）	西川満訳（戦中版）
卻說美猴王榮歸故里，自剽了混世魔王，奪了一口大刀，逐日操演武藝，教小猴砍竹為標，削木為刀，治旗幡，打哨子，安營下寨，頑要多時。	悟空は混世魔王を退治して分捕った大刀を使ひ、毎日武藝の練習をしてゐたが、家來の猿たちにも立派な武器を持たせてやりたいと思つて、
忽然靜坐處，思想道：「我等在此，恐作耍成真，或驚動人王，或有禽王、獸王說我們操兵造反，興師來相殺，此等竹竿木刀，如何對敵？須得鋒利劍戟方可。如今奈何？」	「いざといふ時に役に立つ、何か手頃な武器をたくさん手に入れる工夫はないだらうか」と相談した。
眾猴聞說，個個驚恐。	
正說間，轉上四個老猴，兩個是赤尻馬猴，兩個是通背猿猴，走在面前道：「大王，若要鋒利器械，甚易。	すると尻の眞赤な二匹の猿が進み出て、
我們這山向面去，有二百里水面，那廂乃傲來國界。城中軍民無數，必有銅鐵等匠作。	「この山から東の方、水路二百里の所に傲來國の都がありますが、そこには軍隊や大勢の市民が住んでゐますから、必ず金銀銅鐵が山程あると思ひます。
大王若去那里，或買或造些兵器，教演我等，守護山場，誠所謂長久之計也。」	大王さまには、早速そこへお出かけになつて、買ふなり、作らせるなり、なさつたならば、その武器によつて、いつまでも私共の山を守ることが出来ませう。」
悟空聞說，滿心歡喜，急縱筋斗雲，霎時間過了二百里水面。果然那廂有座城池，六街三市，大小人家，甚是熱鬧。	悟空はたちまち雲に乗り、またいく間に二百里東へゆくと、なるほど大きな城がある。雲の上から、賑やかな城内をしばらく眺めてゐたが、
悟思想道：「這裡定有現成的兵器，我待下去買他幾件，還不如使個神通覓他幾件倒好。」	(新しい武器をつくるよりも、いつそ出来合を貰つていつの方が便利だわい)と思つて、何やら考へてゐたが、
他就捻訣念咒，向巽地上吸二口氣，吹將去，便是一陣狂風，飛沙走石，	やがてブーツと一息吹くと、にはかに一陣の狂風が起つて、砂を飛ばし石を走らせた。
風起處，驚散了那傲來國內軍民，街市都關門閉戶，無人敢走。	城内の人々は驚きあわてゝ家の中に逃げこみ、門をしつかり閉めてしまつた。もはや路上に、人影がなくなったのをみて、
悟空才按下雲頭，徑闖入兵器館、武庫中，打開門扇看時，那裏面十八般兵器件件俱備。	悟空は悠々と雲から降り、兵器館の門をあけると、あるわあるわ山程武器が積んである。
一見甚也道：「我一人能拿幾何？還使個分身法搬將去罷。」	
即拔一把毫毛，嚼爛噴去，念咒叫：「變！」	そこで悟空、自分の身體から一つかみの毛を抜いて、口中で噛みバツと吐き出すと、
變做千百個小猴，都亂搬亂搶，搬個罄淨。	それがたちまち千三百匹の小猿になり、武器の山にかけ上つて、手に手に武器を取つて運び出す。

徑踏雲頭，弄個攝法，帶領小猴，俱回本處。	頃合を見て悟空は再び雲を呼び、小猿たちと一緒に武器を乗せ、花果山へ引き返すと、
猴王按落雲頭，將身一抖，收了毫毛，將兵器都亂堆在山前，叫道：「小猴們，都來領兵器。」	小猿をもとの毛に戻し、持ち歸つた武器を家來たちにかけて、
眾猴都去搶刀奪劍，搥斧爭槍，扯弓扳弩，吆吆喝喝，耍了一日。次日，依舊排營。悟空會集羣猴，計有四萬七千餘口。早驚動滿山怪獸，各樣妖王，共有七十二洞，都來參拜猴王為尊。每年獻貢，四時點卯。隨班操演，隨節徵糧。	
齊齊整整，把一座花果山造得似鐵桶金城。	山を守ることにした。
日逐家習武演師。	家來の猿たちも今までのやうな竹切や棒切とは違って、本當の武器を貰つたので、大いに氣勢があがり、一心に武藝を練習した。
美猴王正喜間，忽對眾說道：	ところがある日、悟空は、自分の大刀を殺げだして、
「汝等弓弩熟諳，兵器精通，奈我這口刀着實狼狽，不遂我意，奈何？」	「どうもこの刀は面白くない。俺にふさはしいよい武器はないものかなあ」と呟やいた。
四老猴上前道：	すると一匹の家來が答へて、
「大王乃是仙聖，凡兵是不堪用。但不知大王水裏可能去得？」	
悟空道：「我自聞道之後，有七十二般地煞變化，會筋斗雲有莫大的神通；善能隱身遯身，起法攝法。上天有路，入地有門；步日月無影，入金石無碍；水不能溺，火不能焚。那些於去不得？」	
四猴道：「大王既有此神通，我們這鐵板橋下，水通東海龍宮。大王若肯下去，尋着老龍王，問他要件兵器，卻不趣心？」	「大王さま、この橋の下の水は、すぐ東海龍宮に通じてゐます。その龍王がきつと立派な武齡を持つてゐると思ひますが」
悟空聞言，甚喜道：「等我去來。」	「なるほど、そいつはよい考だ」と悟空は喜んで、
即跳至橋頭，使一個閉水法，捻著訣，撲的鑽入波中，分開水路，徑入東洋海底。	善は急げとばかりに、橋からとび降り、分水の法を使つて波の底へ入つて行つた。
正行間，忽見一個巡海的夜叉，擋住問道：「那推水來的，是何神聖？說個明白，好通報迎接。」	悟空が海の底へ着くと、警戒中の巡海夜叉が見とがめて、「こら、その方は何ものか」
悟空道：「吾乃花果山天生聖人孫悟空，是你老龍王的緊鄰，為何不識？」	「俺は花果山の天生聖人孫悟空だ」

夜叉聽說，急轉水晶宮傳報道：	夜叉は驚いて水晶宮に駆けつけ、東海龍王に報告した。
「大王，外面有個花果山天生聖人孫悟空，口稱是大王緊鄰，將到宮也。」	
東海龍王敖廣即忙，出宮迎道：「上仙請進。」	龍王は恭々しく自ら出むかへて、
直至宮裡相見，上坐獻茶畢，問道：「上仙幾時得道？授何仙術？」	「私への御用は」
悟空道：「我自生身之後，出家修行，得一個無生無滅之體。」	
近因教演兒孫，守護山洞，奈何沒件兵器。久聞賢鄰享樂瑤宮貝闕，必有多餘神器，特來告求一件。」	「うむ俺が使ふんだが、何か手頃の武器がないかと思つてね、實は無心に參上したんだ」 悟空はすましてさう答へた。
龍王見說，不好推辭，即著鰲都司取出一把大桿刀奉上。	龍王は内心（これは厄介な奴がやつて來たものだ）と思つたが、表面はわざとうれしさうな顔をして、「それはそれは、よくいらつしやいました」と家來を呼んで大きな刀を持って來させた。
悟空道：「老孫不會使刀，乞另賜一件。」	悟空は手をふつて、「そんなのは駄目だ」
龍王又著鮑太尉鱧力士，擡出一桿九股叉來。	仕方なく龍王は、九股叉、
悟空跳下來，接在手中，使了一路，放下道：「輕，輕，輕，又不趁手。再乞另賜一件。」	
龍王笑道：「上仙，你不曾看，這叉有三千六百斤重哩。」	
悟空道：「不趁手，不趁手。」	
龍王心中恐懼，又著鯁提督、鯉總兵擡出畫桿方天戟。那戟有七千二百斤重。	方天戟と云つた重い武器を持つて來させたが、
悟空接在手中，丟幾個架子，撒兩個解數，插在中間道：「也還輕，輕，輕。」	悟空はこんな軽いものはやはり駄目だと云つて満足しない。
老龍王一發害怕道：「上仙，我宮中只有這根戟重，再沒甚麼兵器了。」	そこで龍王は、「もうこれ以上重いものはありません」
悟空笑道：「古人云：『愁海龍王沒寶』哩！你再去尋尋看，若有可意的，一一奉價。」	「本當にないか」
龍王道：「委的再無。」	

正說處，後面閃過龍婆、龍女道：「大王，觀看此聖，決非小可。我們這海藏中，那一塊天河定底的神珍鐵，這幾日霞光艷艷，瑞氣騰騰，敢莫是該出現，遇此聖也？」	「あ、さういへば、ただ一つ、
龍王道：「那是大禹治水之時，定江海淺深的一個定子，是一塊神鐵，能中何用？」	昔大水の時、夏の大禹が治水に使った鐵の棒が残つてゐるばかりです」
龍婆道：「莫管他用不用，且送與他，憑他怎麼改造，送出宮門便了。」	
老龍王依言，向悟空說了。	
悟空道：「拿出來我看。」	
龍王搖手道：「扛不動，擡不動，須上仙親自去看。」	
悟空道：「你引我去。」	
龍王引至海藏中間，忽見金光萬道。	と自ら藏の中へ案内した。悟空が行つてみると、長さ一丈餘の太い鐵の棒が金色の光を放つてゐる。
龍王指道：「那放光的便是。」	
悟空擦衣上前，摸了一把，乃是一根鐵柱子，約有斗來粗，二丈有餘長。他儘力兩手擡過道：「忒粗忒長些，再短細些方可用。」	手にとつて、「一寸長すぎるかな」
說畢，那寶貝就短了幾尺，細了一圍。	と云ふと。みるみる棒は縮んで、長さも太さもちやうど手頃のものになつた。
悟空又顛一顛道：「再細些更好。」	
那寶貝真個又細了幾分。	
悟空十分歡喜，拿出海藏看時，原來兩頭是兩個金箍，中間乃一段烏鐵。	不思議に思つて見ると、
緊挨箍有鐫成的一行字，喚做：「如意金箍棒，重一萬三千五百斤。」	如意金箍棒重『一萬三千五百斤』と彫つてある。
心中暗喜道：「想必這寶貝如人意。」	悟空をすつかり喜んで、「こいつは申分ない。
一邊走，一邊心思口念，手顛著道：「再短細些更妙。」	
拿出外面，只有二丈長短，碗口粗細。	

你看他弄神通，丟開解數，打轉水晶宮裡。	
謊得老龍王膽戰心驚，小龍王魂飛魄散，龜鼈鼉 鼉皆縮頸，魚蝦螯蟹盡藏頭。	
悟空將寶貝執在手中，坐在水晶宮殿上，對龍王 笑道：「多謝賢鄰厚意。還有一說。當時若無此 鐵，倒也罷了；如今手中既拿著他，身上更無衣 甲相趁。	
你若有披掛，索性送我一件，一總奉謝。」	ついでに甲も頂戴しよう」
龍王道：「這個卻是沒有。」	「甲は持つて居りません」あきれながら龍王が答へると、
悟空道：「一客不犯二主。若沒有，我也定不出 此門。」	
龍王道：「煩上仙再轉一海，或者有之。」	
悟空又道：「走三家不如坐一家。千萬告求一 件。」	
龍王道：「委的沒有，如有即當奉承。」	
悟空道：「真個沒有？就和你試試此鐵！」	悟空は貰つたばかりの如意棒をふり廻す気配をみせて、「頂戴出来ぬ中は、そこでも動かん」と云ふ。
龍王慌了道：「上仙，切莫動手，待我看舍弟處 可有，當送一副。」	東海龍王はすつかり弱つて、
悟空道：「令弟何在？」	
龍王道：「舍弟乃南海龍王敖欽、北海龍王敖 順、西海龍王敖閏是也。」	南海、北海、西海の
悟空道：「我老孫不去，不去。俗語謂『賒三不 敵見二』，只望你隨高就低的送一副便了。」	
老龍道：「不須上仙去。我這裡有一面鐵鼓、一 口金鐘，凡有緊急事，擂得鼓響，撞得鐘鳴，舍 弟們就頃刻而至。」	弟の
悟空道：「既如此，快些去擂鼓撞鐘。」	
真個霎時，鐘鼓響處，果然驚動那三海龍王，須 臾來到。	三龍王を呼び寄せ、
敖欽道：「大哥，有甚緊事，擂鼓撞鐘？」老龍 道：「賢弟，不好說。有一個花果山甚麼天生聖 人，早間來認我做鄰居。要一件兵器，獻鋼叉嫌	相談の結果、

<p>小，奉畫戟嫌輕；將一塊天河定底神珍鐵，自己拿出，丟了些解數。如今坐在宮中，又要索甚麼披掛。我處無有，故響鐘鳴鼓，請賢弟來。你們可有甚麼披掛，送他一副，打發他出門去罷了。」</p> <p>敖欽聞言，大怒道：「我兄弟們點起兵拿他不是？」</p> <p>老龍道：「莫說拿，莫說拿。那塊鐵，挽著些兒就死，磕著些兒就亡。」</p> <p>敖閏說：「二哥不可與他動手。且只湊副披掛與他，打發他出了門，啟表奏上上天，天自誅也。」</p>	
<p>敖順道：「說的是。我這裡有一雙藕絲步雲履哩。」</p>	<p>藕絲步雲履、</p>
<p>敖閏道：「我帶了一副鎖子黃金甲。」</p>	<p>鎖子黃金甲、</p>
<p>敖欽道：「我有一頂鳳翅紫金冠哩。」</p>	<p>鳳翅紫金冠を</p>
<p>老龍大喜，引入水晶宮相見了，以此奉上。悟空將金冠、金甲、雲履都穿戴停當，使動如意棒，一路打出去，對眾龍道：「聒噪，聒噪。」四海龍王甚是不平，一邊商議進表上奏不題。</p>	<p>それぞれの龍王から悟空に贈ったので</p>
<p>這猴王，分開水道，徑回鐵板橋頭，攬將上去。</p>	<p>悟空はここにこして、再び水をくぐり花果山の水簾洞へ戻つて來た。</p>
<p>只見眾猴，都在橋邊等候。忽然見悟空跳出波外，身上更無一點水濕，金燦燦的走上橋來。</p>	
<p>說得眾猴一齊跪下道：「大王好華彩耶！」</p>	<p>家來の猿たちは甲冑姿の大王を取りまいて、もの珍らしさうに騒ぎ立てたが、</p>
<p>悟空滿面春風，高登寶座，將鐵棒豎在當中。</p>	<p>ふと大きな如意棒をみつくて、</p>
<p>那些猴不知好歹，都來拿那寶貝，卻便似蜻蜓撼鐵樹，分毫也不能動。</p>	<p>みんなで持ち上げようとするが、少しも動かない。</p>
<p>一個個咬指伸舌道：「爺爺呀！這般重，虧你怎的拿來也！」</p>	<p>「こんな重いものを」と不審さうに悟空を見上げると、</p>

<p>悟空近前，舒開手，一把擡起，對眾笑道：「物各有主。這寶貝於海藏中，也不知幾千百年，可</p> <p>可的今歲放光。龍王只認做是塊黑鐵，又喚做天河鎮底神針。那廝們都扛擡不動，請我親自去拿。那時此寶有二丈多長，斗來粗細。我意思嫌大，他就小了許多；再教小些，他又小了許多，上有一行字，乃『如意金箍棒，一萬三千五百斤』。你都站開，等我再叫他變一變看。」</p>	<p>悟空は笑ひながら、</p>
<p>他將那寶貝顛在手中，叫：「小！小！小！」</p>	<p>「縮まれ」と棒に命じた。</p>
<p>即時就小做一個繡花針兒相似，可以摑在耳朵裡面藏下。</p>	<p>すると棒はみるみる縮まつて、繡花針位の大きさになつたから、</p>
<p>眾猴駭然道：「大王，還拿出來耍耍。」</p>	<p>猿たちはものも云へず、あきれてゐる、</p>
<p>猴王真個去耳朵裡拿出，托放掌上叫：「大！大！大！」即又大做斗來粗細，二丈長短。他弄到歡喜處，跳出洞外，將寶貝摺在手中，使一個法天像地的神通，把腰一躬，叫聲：「長！」他就長的高萬丈，頭如泰山，腰如峻嶺，眼如閃電，口似血盆，牙如劍戟；</p>	
<p>手中那棒，上抵三十三天，下至十八層地獄。</p>	<p>「伸びれば上は三十三天に至り、下は十八層の地獄に及んで天地間を貫き、</p>
<p>把七十二洞妖王，都說得磕頭禮拜，戰戰兢兢。</p>	
<p>霎時收了法像，將寶貝還變做個繡花針兒，藏在耳內，復歸洞府。</p>	<p>縮まれば耳の中にも入つてしまふ」と如意棒の由來を説き聞かせた。</p>
<p>慌得那各洞妖王，都來參賀。此時遂大開旗鼓，依前教演。猴王將那四個老猴封為健將，兩個赤尻馬猴喚做馬流二元帥，兩個通背猿猴喚做崩芭二將軍。將那安營下寨、賞罰諸事，都付與四健將維持。他放下心，日逐騰雲駕霧，遨遊四海，廣交豪傑。此時又會了個七弟兄，乃牛魔王、蛟魔王、獅魔王、獅狒王、獼猴王、獼狻王，連自家美猴王七個。日逐講文論武，走斝傳觴，朝去暮回，無限快樂。</p>	
<p>一日，在本洞安排筵宴，請六王赴飲，吃得酩酊大醉。</p>	<p>ある日、悟空は友人と共に酒盛をしたが、すっかり酔つぱらつて、</p>

送六王出去，敲在鐵板橋邊松陰之下，霎時間睡著。	松の樹の根もとに寝こんでしまった。
四健將領眾圍護，不敢高聲。	
只見那美猴王睡裡，見兩人拿一張批文，上有「孫悟空」三字，走近身，不容分說，套上繩，就把美猴王的魂靈兒索了去，踉踉跄跄，直帶到一座城邊。	すると夢の中に、二名の人が現れて、何やら手に紙片を持つてゐる。何気なく見ると、その紙には『孫悟空』と書いてある。不思議に思つて立ち上らうとすると、いきなり悟空をつがまへて繩をかけ、大きな城の前へ連れて行つた。はなはだ電撃的な戦法である。
猴王漸漸酒醒，忽擡頭觀看，那城上有一鐵牌，牌上有三個大字，乃「幽冥界」。	悟空はすっかり酒の酔もさめて、頭をもたげてよくよく見ると、城の上には『幽冥界』と大きな三つの文字が書かれてある。
美猴王頓然醒悟道：「幽冥界乃閻王所居，何為到此？」	「幽冥界、幽冥界といへば閻魔のゐるところだが、何でまたこの俺を連れて來たんだ」悟空が尋ねると、
那兩人道：「你今陽壽該終，我兩人領批，勾你來也。」	二人は答へて、「お前の壽命が盡きたんだよ」
猴王聽說，道：「我老孫超出三界之外，不在五行之中，已不伏他管轄，怎麼朦朧，又敢來勾我？」	「なに、俺は地煞の變化を覚え、三界を超えた身だ。永久に死ぬ筈はない」
那兩個勾死人，只管扯扯拉拉，定要拖他進去。	
那猴王惱起性來，耳朵中掣出寶貝，幌一幌，碗來粗細。	悟空は怒つて滿身に力をこめると繩はプツリと切れた。たちまち耳から例の綉花針程の如意棒を取り出し、手頃の長さにのばして、
略舉手，把兩個勾死人打為肉醬。	アツと思ふ間に二人を叩き殺してしまつた。正に電撃の報復である。
自解其索，丟開手，輪著棒，打入城中。	それでもなほ、腹のをさまらぬ悟空は如意棒を縦横無盡にふりまはして、閻魔の城中にあばれこみ、
諛得那牛頭東躲西藏，馬面南奔北跑。	あたるを幸ひ牛頭馬頭や赤鬼青鬼を片つばしからやつつけた。驚いたのは數多の鬼で、(氣の強い亡者もあるものだ。これは地獄始まつて以來の珍事)とあわてふためいて逃げ廻る。
眾鬼卒奔上森羅殿，報著：「大王，禍事！禍事！外面一個毛臉雷公打將來了。」	
慌得那十殿冥王急整衣來看，見他兇惡，即排班高叫道：「上仙留名！上仙留名！」	この騒ぎに何ごとかと閻魔大王も現れる。

<p>猴王道：「你既認不得我，怎麼差人來勾我？我本是花果山水簾洞天生聖人孫悟空。你等是甚麼官位？快報名來，免打。」</p>	<p>すると悟空は、「やい、俺は天生聖人孫悟空といふものだ。」</p>
<p>十王躬身道：「我等乃秦廣王、楚江王、宋帝王、忤官王、閻羅王、平等王、泰山王、都市王、卞城王、轉輪王。十殿冥王是也。」</p>	
<p>悟空道：「汝等既登王位，乃靈顯感應之類，為何不知好歹？」</p>	
<p>我老孫修仙了道，與天齊壽，超昇三界，跳出五行，為何著人拘我？」</p>	<p>俺の壽命は天と同じく不滅の筈、何を血迷つて呼び寄せたのか」と今にも打つてかゝらうとするので、大王もあきれて、とつさの逃げ口上に、</p>
<p>十王道：「上仙息怒。普天下同名同姓者多，敢是那勾死人錯走了？」</p>	<p>「多分人違ひでござらう」</p>
<p>悟空道：「胡說！胡說！常言道：『官差吏差，來人不差。』你快取生死簿子來看！」</p>	<p>「よし、それなら壽命の帖簿を持つて來て見せてくれ」</p>
<p>十王聞言，即請上殿查看。</p>	
<p>悟空執著如意棒，徑登森羅殿上，正中間南面坐下。</p>	
<p>命掌案的判官取出文簿來。</p>	<p>大王はやむなく、判官に命じて、森羅殿から大事な帖簿を取り出して來た。</p>
<p>十類中，逐一查看：羸虫、毛虫、羽虫、昆虫、鱗介之屬、俱無他名。又看到猴屬之類，原來這猴似人相不入人名；似走獸，不伏麒麟管；似飛禽，不受鳳凰轄。</p>	
<p>另有個簿子，悟空親自檢閱，直到那「魂」字一千三百五十號上，方注著孫悟空名字，乃「天產石猴，該壽三百四十二歲，善終」。</p>	<p>悟空、たちまち一千三百五十冊を見終り、次に目を轉ずると、自分の名が書いてある。『孫悟空。天生の石猿。壽誕三百四十二歲。善終』</p>
<p>悟空道：「我也不記壽數幾何，且只消了名字便罷。」取筆過來，飽搥濃墨，把猴屬之類，但有名者，一概勾之，掙下簿子道：「了帳，了帳，今番不伏你管了。」一路棒，打出幽冥界。</p>	<p>「ははあ、これだな」とうなづいて、傍にあつた筆を取ると、たつぷり墨汁をつけて、自分の名をベタベタに塗りつぶした、ついでに近くにあつた同じ仲間の猿の名前もみんな棒を引き、「これで、よからう」と</p>
<p>那十王不敢相近，都去翠雲宮，同拜地藏王菩薩，商量啟表，奏聞上天。</p>	

<p>這猴王打出城中，忽然絆著一個草紮縫，跌了個躡踵，猛的醒來，乃是南柯一夢。</p>	<p>大得意で城を出たかと思ふと、ふつと眼がさめた。気がつくともやはり自分は松の樹の下に眠つてゐる。が、どう考へてもただの夢とは思はれない。俺の魂がきつと俺に代わつて幽冥界に行ったのであらうと、</p>
<p>才覺伸腰，只聞得四健將與眾猴高叫道：「大王，吃了多少酒，睡這一夜，還不醒來？」</p>	
<p>悟空道：「睡還小可，我夢見兩個人來勾我，把我帶到幽冥界，卻才醒悟。是我顯神通，直嚷到森羅殿，與那十王爭炒，將生死簿子看了，但有我等名號，俱是我勾了，都不伏那廝所轄也。」</p>	<p>早速猿たちを呼んで、今の出来事を話すと、</p>
<p>眾猴磕頭禮謝。自此，山猴多有不老者，以陰司無名故也。美猴王每日聚樂不題。</p>	<p>「それはめでたい、めでたい」と猿たちもお祝ひの言葉を述べた。</p>
<p>卻說玉皇上帝，一日駕坐金闕雲宮靈霄寶殿，聚集文武仙卿早朝之際，忽有丘弘濟真人啟奏道：「萬歲，通明殿外有東海龍王敖廣進表，聽天尊宣詔。」</p>	<p>ある日、天上の玉皇上帝が、靈霄殿にお出ましになると、東海龍王から、</p>
<p>玉皇傳旨：「著宣來。」</p>	
<p>敖廣宣至殿下，禮拜畢，引奏仙童接上表文。</p>	
<p>表曰：「水元下界東勝神洲東海小龍臣敖廣啟奏大天聖主玄穹高上帝君：</p>	
<p>近因花果山水簾洞妖仙孫悟空者，欺虐小龍，強坐水宅，索兵器，要披掛。臣敖廣等獻神珍之鐵棒，鳳翅之金冠，與鎖子甲、步雲履，以禮送出。他仍弄武藝，顯神通，施法施威，逞兇逞勢，甚為難制</p>	<p>「花果山水簾洞の妖仙で、孫悟空と申すもの、龍宮にあばれこみ、力をたのんで武器をうばひ、その上、大勢の魚族を傷つけました。</p>
<p>伏望聖裁乞遣天兵，收此妖孽，庶使海嶽清寧，下元安泰。謹奏。」</p>	<p>どうぞ一日も早く天兵を下して、この妖猿を御征伐下さいますやう」との上奏があった。</p>
<p>聖帝覽畢，傳旨：「著龍神回海，朕即遣將擒拿。」</p>	<p>玉帝が驚いて居られると、</p>
<p>老龍王頓首謝去。</p>	
<p>下面又有葛仙翁天師啟奏道：</p>	
<p>「萬歲，有冥司秦廣王賚奉幽冥教主地藏王菩薩表文進上。」</p>	<p>またまた十大冥王が、恭々しく御前に現れて、</p>

傳言玉女接上表文。	
表曰：「幽冥境界，乃地之陰司。天有神而地有鬼，陰陽輪轉；禽有生而獸有死，反復雌雄。此自然之數也。」	
今有花果山水簾洞天產妖猴孫悟空，逞惡行兇，不服拘喚。	「花果山水簾洞に居ります天産の妖猿、孫悟空、實に兇惡なる奴にて、
弄神通，打絕九幽鬼使；恃勢力，驚傷十殿慈王。大鬧森羅，強銷名號。	森羅殿に入りこみ大切な壽命簿に墨をなすりつけました。
致使猴屬之類無拘，彌猴之畜多壽；寂滅輪迴，各無生死。貧僧具表，冒瀆天威。	
伏乞調遣神兵，收降此妖，整理陰陽，永安地府。謹奏。」	何卒こ奴を御退治下さいますやう、願ひ致します」と申し上げた。
玉皇覽畢，傳旨：「著冥君回歸地府，朕即遣將擒拿。」	そこで玉帝は一先づ二人を引きとらせてから、
秦廣王亦頓首謝去。	
大天尊宣眾文武仙卿，問曰：「這妖猴是幾何產育，何代出身，卻就這般有道？」	多くの家來に向つて、「一體この猿はどういふ奴であらうか」とお尋ねになつた。
班中閃出千里眼、順風耳道：「這猴乃三百年前天產石猴。當時不以為然，不知這幾年在何方修煉成仙，降龍伏虎，強銷死籍也。」	
玉帝道：「那路神將下界收伏？」	
言未已，班中閃出太白長庚星，俯伏啟奏道：「上聖，三界中凡有九竅者，皆可修仙。」	すると太白星が進み出て、「申し上げます。
此猴乃天地育成之體，日月孕就之身，今既修成仙道，有降龍伏虎之能，與人何異？」	この者は天地を父母として生れ、後、神仙の道を修めましたもの、征伐をなさいますよりも、
臣啟陛下，可念生化之慈恩，降一道招安聖旨，把他宣來上界，授他一個大小官職，拘束此間。若受天命，再行陞賞；若違天命，就此擒拿。一則不動眾勞師，二則收仙有道也。」	よくみちびいてやれば立派な道者となりませう」
玉帝甚喜，道：「依卿所奏。」	玉帝はこの意見を御取り上げになつて、
即著文曲星官修詔，著太白金星招安。	早速、太白星を使者としてお遣はしになつた。

金星領旨，出南天門外，按下祥雲，直至花果山水簾洞，對眾小猴道：「我乃天差天使，有聖旨在此，請你大王上界。快快報知。」	悟空はある夜、大空の金星が異様に輝き、しかも次第に下界に近づいてくるのを見て、不思議に思つてみると、
洞外小猴一層上傳至洞天深處，道：「大王，外面有一老人，背著一角文書，言是上天差來的天使，有聖旨請你也。」	たちまちキラキラした金星は、太白星老人の姿となつて、悟空の前に現れた。
猴王大喜，道：「我這兩日正思量要上天走走，卻就有天使來請。」叫：「快請進來。」	
猴王急整衣冠，門外迎接。	
金星徑入當中，面南立定道：「我是西方太白金星，奉玉帝招安聖旨，下界請你上天，拜受仙籙。」	悟空は玉帝の御召を聞き、
悟空笑道：「多感老星降臨。」	非常に喜んで
教小的們安排筵宴款待。	
金星道：「聖旨在身，不敢久留。就請同往，」	
悟空即喚四健將，分付：「謹慎教演兒孫，待我上天去看看路，卻好帶你們上去也。」	
四健將領諾。	
這猴王與金星縱起雲頭，昇在空霄之上。	太白星に従ひ、天上界に上つた。
正是那：高遷上品天仙位，名列雲班寶籙中。	
畢竟不知授個甚麼官爵，且聽下回分解。	